

北野家文書及び新出の加藤清正・忠広知行宛行状について

木山 貴満

北野家文書は平成二十九年四月に熊本博物館へと寄贈された、総数二〇点の文書である。資料寄贈に至る経緯としてはアメリカ在住の同家ご子孫の方より資料内容に関する相談を受け、筆者が調査協力を行ったことが縁となり、ご子孫が資料の「里帰り」をご希望されたことで寄贈に至ったものである。

まず、資料来歴に関するお話をうかがったところ、ご寄贈者のご両親の代にアメリカへと移住され、資料もこのときに日本から持参されていたとのことであった。資料は移住先でも大事に保管されており、しばしば寄贈者が自宅で資料を目にすることもあったという。しかし、資料内容についてはすでに未詳の部分も多く、ご寄贈者のご両親も資料が日本国外にあることを長年気に掛けておられたとのことであった。資料相談に関するやり取りは日本国内居住のご親戚の方を介し、主に電子メール等を通じて行わせていただいた。資料画像をメールで拝見し、当方からは内容や資料性格等に関するコメントをお送りした。

その後、肥後藩領主の加藤清正・忠広父子から発給された知行宛行状二通が含まれていたこともあり、特に熊本博物館を寄贈先としてご指定いただくにいたった。大変ありがたいことにご寄贈者がアメリカより資料をご持参のうえ、当館執務室へご来室いただき、寄贈の運びとなったものである。本稿ではこの北野家文書全体の概要をまとめるとともに、清正・忠広知行宛行状について紹介したい。

北野家文書の全容は後掲資料目録の通りである。なお、文書の原秩序を示すような痕跡は特に見られなかったため、当館への受入後に行った整理作業では資料の並び順に従い、整理番号を付与したことを断っておく。

北野家文書について

整理番号一九「北野氏系譜」等をもとに、江戸初期～明治維新期までの概略を左に示す。

「北野氏系譜」は同家初代として北野直治（初名 五右衛門。のち弥三左衛門）の名を挙げている。弥三左衛門は加藤肥後守忠広に仕えたが、加藤家改易により加藤忠広が出羽庄内へと配流されると弥三左衛門は浪人の身となった。なお、詳しくは後述するが、清正からの知行宛行状（整理番号一）では宛名が「与左衛門」となっている。これにより北野弥三左衛門直治の先代として「与左衛門」が存在し、少なくとも北野家が加藤家に仕えるようになったのは清正代からであると想定される。その後、代々北野家では与左衛門、弥三左衛門を通称とした者が多いことからすると、両者が近世北野家の直接の祖に位置したものでだろう。

ちなみに『肥後加藤侯分限帳』¹⁾によると、加藤清正家臣団のなかに「北 与左衛門」の名が見られる。記載石高等が一致することから、『分限帳』では「北野」の「野」が省略されたものと判断可能である。便宜上、本稿では初代を与左衛門、二代を弥三左衛門と表記する。

さて、浪人となった弥三左衛門はその後豊前小倉において、小笠原忠真に召し抱えられることとなった。寛永九年（一六三二）、加藤忠広が改易となり、当時豊前小倉を治めていた細川忠利が肥後へ移封され、豊前小倉に入ったのが小笠原忠真である。北野家は加藤家改易後間もない時期に肥後を離れていたものと思われる。

弥三左衛門は二五〇石、御馬廻役という待遇で迎えられており、寛永一五年（一六三八）に勃発した島原天草の乱の際には、士大将大羽内蔵助の手に属して従軍している。

その後、北野家は近世期を通じて小笠原家家臣として代を重ね、明治維新を迎えた。全二〇点の資料中、清正・忠広知行宛行状を除く一八点が小笠原家家臣時代のものであるのも、こうした経緯を反映しているだろう。

小笠原家家臣としての北野家

小笠原家家臣時代の文書はおおよそ歴代藩主からの知行宛行状①、書状類②、北野家自体に関する資料③の三分類に分けることができる。紙幅の都合上、本稿でそのすべてを紹介することは叶わないが、②の書状類の中には注目できるものがある。

すなわち整理番号五・七・九・一〇・一六の資料に見られる、北野与左衛門の「隠密」「密用方」としての働きを示す書状である。特に整理番号五・九・一〇などは、五代藩主の小笠原忠苗^{ただみつ}から直接発給されたものである。いずれも隠密方への任命、情報報告先の指定、転役の伝達などであり、一連の資料であることを示している。詳細が不明な部分も多いが、整理番号七「太切之御筆入」・同一六「御意書」などをもとに一連の経緯について検討してみたい。

「太切之御筆入」によると、寛政七年（一七九五）三月二五日、三宅源左衛門が北野与左衛門宅を訪問し、藩主直筆の書付一通を見せた。「其方（木山注・与左衛門）に仰せ付けられていた隠密任務は暫く休職となっていたが、この度以前の通り隠密役を務めるように命があった」という内容が源左衛門より伝達されている。すなわち、北野与左衛門は寛政七年前後、藩主小笠原忠苗による直命のもと、隠密職を務めていたことが分かる。当時豊前小倉藩では犬甘知寛^{いぬかみ}を用いた藩財政再建が推し進められており、与左衛門の隠密任務もこれに何らかの関係を持つていた可能性が考えられるが、未詳である。整理番号五の藩主忠苗書状では「其方以前之通隠密申付候已上」と記されており、このとき源左衛門が持参した書付はこれに該当するものだろう。

その後、整理番号一〇では藩主忠苗が与左衛門の「内用向」での働きに満足したこと、先立って転役を申し付けたので以後は「其の義に及ばない」ことが伝えられている。「内用向」が具体的に何を示しているか曖昧な部分もあるが、このとき与左衛門の隠密職が解かれたのではないだろうか。

整理番号一六「御意書」は北野与左衛門（文末註2参照）に足高三〇石を伝えたものである。これは北野与左衛門が「悪党根元之次第」を報告し、その実態が明らかになったこと、与左衛門がこれに関して昼夜を問わず忠節を尽くしたことに對する褒賞として与えられたものであった。なお、「北野氏系譜」では六代目弥次兵衛（与左衛門）直方、文政四年（一八二二）の項として「御加恩」三〇石が記されている。

これに前後して、当時の藩主小笠原忠固が幕閣就任を志向したことにより、小倉藩は藩を二分する深刻な勢力争い（白黒騒動）を生じていた。文政三年（一八二〇）に首謀者の処罰が行われ一応の落着を見ているが、当該「御意書」はこれに関連するものかもしれない。いずれにしても北野家が五代目の直行、六代目直方にわたって藩主直命の「隠密方」を務めていたことは興味深い。以後北野家には足高三〇石を加えた二八〇石が家禄として与えられ、明治維新を迎えているⁱⁱⁱ。なお、「北野氏系譜」は文政七年（一八二四）、小倉藩士大日方直常^{iv}によって著されたものであるが、同資料には北野家「隠密」職務について一切記載が無い。

加藤清正・忠広発給の知行宛行状について

前項で述べた通り、北野家はもともと加藤清正・忠広に仕えた家柄である。本項では整理番号一「加藤清正知行宛行状」・同二「加藤忠広知行宛行状」について概略を記す。

「加藤清正知行宛行状」は縦三五・五cm、横五三・二cmの楮紙に墨書されたもので、もと折紙を掛幅装としたものである。いづころ表装が改められたものか未詳であるが、用いられている裂地などを観ずる限り近代期以降に改装されたものと思われる。桐箱に納められ、さらに紙製の外箱が附属する。

内容は左の通りである（なお、改行については原文を反映している）。

【整理番号一】加藤清正知行宛行状

「宛行所領之事

御船村之内を以

五百石遣之候
全可所務於抽
忠勤者可加増
之状如件

慶長五年

十二月四日 清正（花押）

北野与左衛門との」

当該知行宛行状は御船村（現・下益城郡御船町）のうち、五〇〇石を宛行うことが記されている。「清正」の署名下に花押が据えられ、宛名は「北野与左衛門」となっている。

当該知行宛行状の作成日付は、慶長五年（一六〇〇）二月四日となっている。周知の事実に類するが、同年は国内を二分した関ヶ原合戦があり、徳川家康ら東軍方に属した加藤清正は肥後において西軍方の隣領・小西領攻略等に当たっていた。清正は一〇月には宇土城を攻略し、時を置かずして旧小西領の闕所宛行を進めるとともに元小西家臣団へ宛てた知行宛行状を数多く発給している（『加藤清正文書目録』^v）。参考となる資料が乏しいため確定はできないが、知行地が元小西領である御船村であることから、北野与左衛門もともと小西家臣団に属していた可能性も想定できるだろう。ただし、この時期清正が発給した知行宛行状は一〇〜十一月に集中しており、この宛行はやや時期が遅れている。どのような経緯があったものか、残念ながら現段階では未詳である。また、前項で見た「北野氏系譜」では当該宛行自体（及び受給者の北野与左衛門）について触れられていないのもやや疑問が残るところである。

次に、「加藤忠広知行宛行状」は縦三七・八cm、横五五・四cmの楮紙に墨書されたもので、清正知行宛行状と同じく、もと折紙を掛幅装としたものである。

【整理番号二】加藤忠広知行宛行状

「宛行所領之事

以玉名郡孛生田

村式百六石六斗

遣之候全可令知

行於抽奉公者可

加増者也

元和七年

八月三日 忠廣（花押）

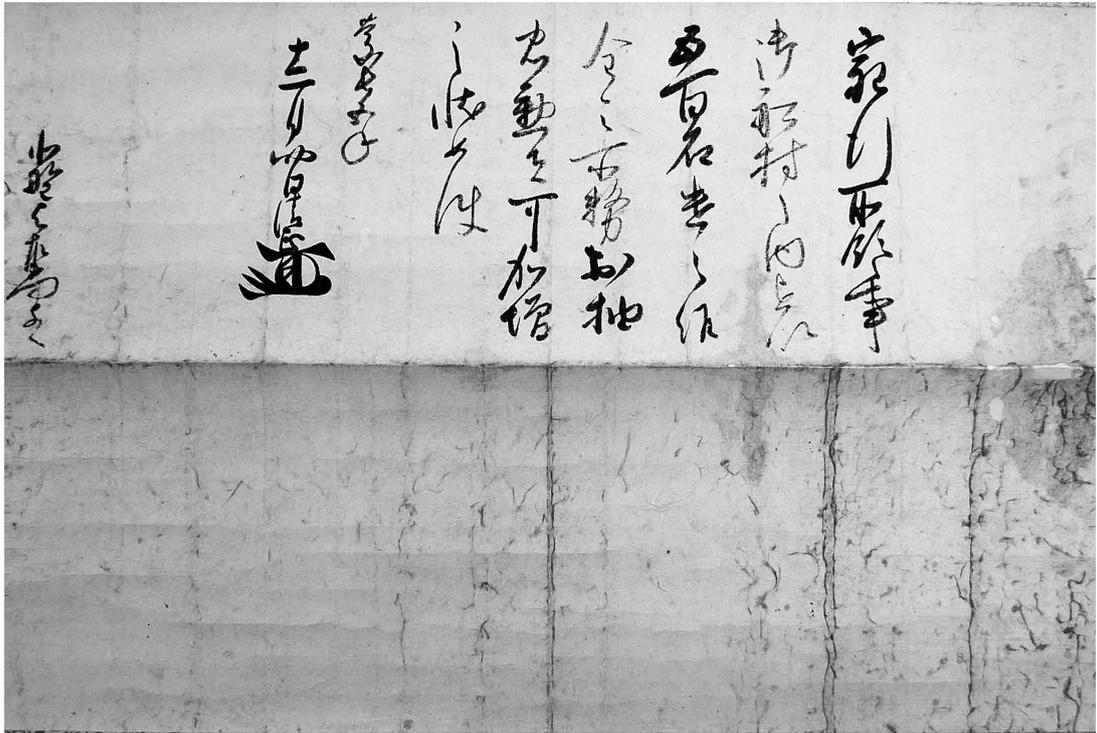
北五右衛門との

玉名郡孛生田村（現・玉名郡和水町）のうち、二〇六石六斗の知行を宛行うことが記されている。一見して知行地が全くの別地へと移り、清正代の知行に比べて半減していることが分かるが、この間の経緯はやはり不明である。

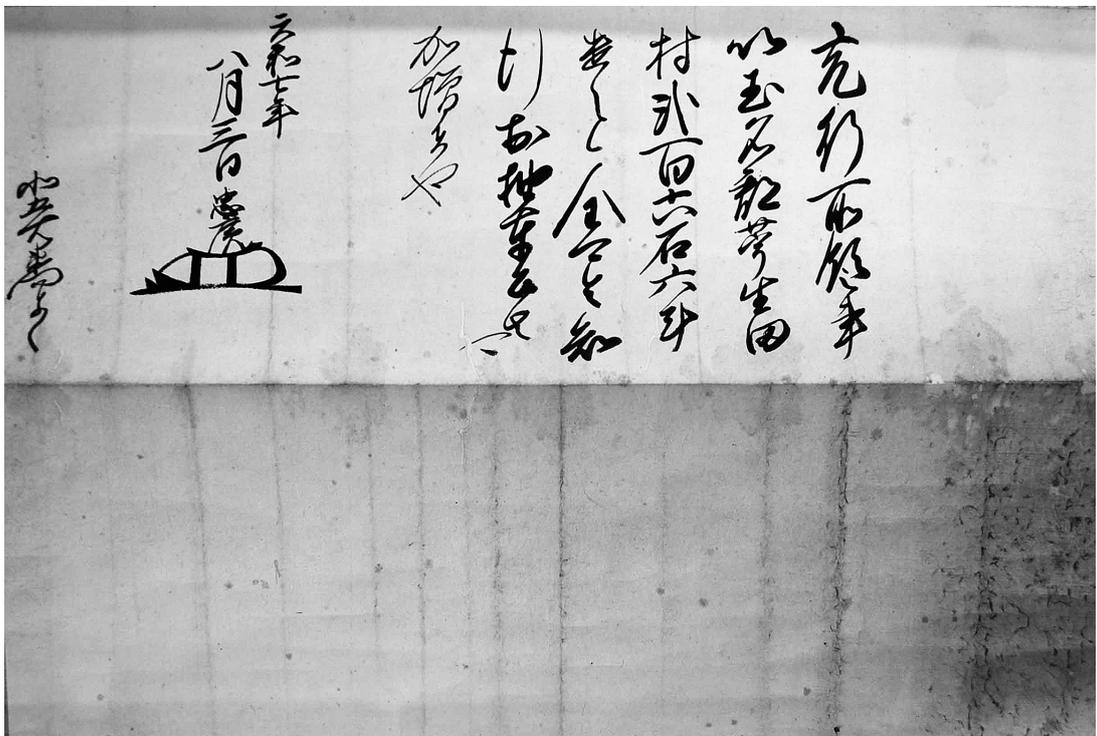
加藤忠広は慶長一六年（一六一一）、清正の死去に伴い一二歳で遺領を継いだ。当該宛行の作成日付は元和七年（一六二一）となっているので、北野家の代替わり等を契機として発給されたものかもしれない。

宛名は「北五右衛門」、すなわち北野五右衛門の名が記されている。既述の通り、この五右衛門がのちに弥三左衛門と名を改め、「北野氏系譜」で同家初代に位置付けられた北野弥三左衛門直治である。

加藤清正・忠廣より北野家宛てに発給された知行宛行状は以上の通りだが、まず何よりも同家において資料が長年大切に保管されてきた事実により敬意を表したい。当該知行宛行状を含め、北野家文書は加藤家臣団編成の態様をうかがう資料として、また同家家臣団の「その後」（加藤家改易後、浪人からの再仕官先での活動）をうかがう資料として貴重なものである。今後当館では十全な保管と適切な公開に努め、永く後世へと伝えていきたい。



【整理番号 1】 加藤清正知行宛行状



【整理番号 2】 加藤忠廣知行宛行状

- i 高野和人編『肥後加藤侯分限帳』（青潮社、一九八七）
- ii 北野家五代目にあたる北野与左衛門直行、もしくは六代目北野弥次兵衛直方だと比定できる。ちなみに「北野氏系譜」によれば、六代目弥次兵衛も後年与左衛門と名乗っている。
- iii 整理番号二・二三・一五など。弘化二年（一八四五）以降の知行宛行状では二八〇石で一貫している。
- iv 大日方氏は「系譜方」一〇〇石取の藩士。
- v 大浪和弥・鳥津亮二・山田貴司編『加藤清正文書目録』（二〇一五年）

資料 番号	資 料 名	作 成 年	差 出 (作 成)	宛 先	数 量	品 質 形 状	法 量 (縦 × 横) cm
			備 考				
14	〔知行宛行状〕	明和三年 戌十一月朔日	花押 (小笠原忠総)	北野与左衛門	1 枚	紙本墨書 折紙	45.6×58.1
			高 250 石 包紙上書「北野与左衛門とのへ」、資料右側染みあり				
15	〔知行宛行状〕	安政四年 巳五月廿七日	花押 (小笠原忠嘉)	北野弥三左衛門	1 枚	紙本墨書 折紙	53.0×67.0
			高 280 石 包紙上書「北野弥三左衛門殿」				
16	御意書 (其方儀悪党根元…)	(江戸中期)	欠	北野与左衛門	1 枚	紙本墨書 折紙	22.1×42.9
			加増 30 石を仰せ付ける 包紙上書「御意書」				
17	〔知行宛行状〕	寛政四年 子九月朔日	花押 (小笠原忠苗)	北野与左衛門	1 枚	紙本墨書 折紙	46.0×60.1
			高 250 石 包紙上書「北野与左衛門との」				
18	〔知行宛行状〕	文化二年 丑三月十五日	花押 (小笠原忠固)	北野与左衛門	1 枚	紙本墨書 折紙	46.0×58.5
			高 250 石 包紙上書「北野与左衛門との」、包紙中破				
19	北野氏系譜	文政七年 甲申六月上旬	大日方直常	—	10 丁	紙本墨書 綴	26.7×19.0
			包紙上書「北野氏系譜」、紙折あり				
20	〔北野家系図断簡〕 (父北野弥三左衛門…)	(近代)	欠	—	1 枚	紙本墨書 切紙	24.2×31.2

北野家文書目録

資料 番号	資 料 名	作 成 年	差 出 (作 成)	宛 先	数 量	品 質 形 状	法 量 (縦 × 横) cm
			備 考				
1	〔加藤清正知行宛行状〕	慶長五年 十二月四日	(加藤) 清正	北野与左衛門	1 点	紙本墨書 掛幅装	(本紙) 35.5×53.2
			もと折紙を掛幅装としたもの。外箱(桐・紙)あり。御船村のうち500石を宛行う。				
2	〔加藤忠廣知行宛行状〕	元和七年 八月三日	(加藤) 忠廣	北 五右衛門	1 点	紙本墨書 掛幅装	(本紙) 37.8×55.4
			もと折紙を掛幅装としたもの。外箱(桐・紙)あり。玉名郡のうち、芋生田村206石6斗を宛行う。				
3	〔書状〕 (継目の御礼)	(年欠) 四月晦日	中野一学	北野俊太郎	1 枚	紙本墨書 切紙	16.2×33.3
			包紙上書「北野俊太郎殿 中野一学」				
4	〔書附包紙2点〕	(江戸中 ～後期)	—	—	2 点	紙本墨書 包紙	22.5×8.5 24.0×8.0
			2点ともに「書附」の墨書上書あり。うち1点には「此書類小倉江・・」の上書あり。				
5	〔書状〕 (隠密申付)	(年欠) 三月廿日	(白字方印) 「源之忠苗」 (小笠原忠苗)	北野与左衛門	1 枚	紙本墨書 切紙	16.4×20.8
6	〔書状〕 (登城の旨)	(年欠) 十一月六日	小笠原監物	北野俊太郎	1 枚	紙本墨書 切紙	16.2×29.7
			包紙上書「北野俊太郎殿 小笠原監物」				
7	太切之御筆入	寛政七年 卯三月廿五日	(北野与左衛門)	—	1 枚	紙本墨書 切紙	25.2×31.7
			「隠密」任命の経緯について記したもの。包紙カ。折れ皺大。				
8	〔北野家系図断簡〕	(江戸後期 ～明治期)	欠	—	1 枚	紙本墨書 切紙	26.1×37.2
9	〔書状〕 (二本武兵衛密用方)	(年欠) 十二月廿二日	(白字方印) 「源之忠苗」 (小笠原忠苗)	北野与左衛門	1 枚	紙本墨書 切継紙	16.0×36.2
			二本武兵衛を密用方に任じたので、密書を提出する場合は同人へ渡すことを命じたもの。紙継ぎ一部外れかけ				
10	〔書状〕 (用向出精・転役)	(年欠) 三月十三日	(白字方印) 「源之忠苗」 (小笠原忠苗)	北野与左衛門	1 枚	紙本墨書 切継紙	16.2×38.0
11	北野累代	(近代)	欠	—	2 丁	紙本墨書 罫紙綴	23.4×16.5
			罫紙は「小倉山田製」				
12	〔知行宛行状〕	元治元年 子十月廿三日	花押 (小笠原忠幹)	北野俊太郎	1 枚	紙本墨書 折紙	51.6×65.1
			高280石 包紙上書「北野俊太郎殿」				
13	〔知行宛行状〕	弘化二年 巳五月朔日	花押 (小笠原忠徴)	北野直次郎	1 枚	紙本墨書 折紙	51.0×64.7
			高280石 包紙上書「北野直次郎殿」				